



荒川を撮る会 中田 迪氏撮影

かわはく No.24

CONTENTS

テーマ展「洪水の記憶」	2
かわはくの展示から「すごろくゲーム」	4
かわはくを支える人たちVI「ボランティア」	4
さいたま川の博物館での地域連携のとりくみ	5
身近な水紀行「岩淵水門と荒川放水路」	6
荒川の支流を訪ねる「中津川」	7
かわはくで学ぼう	8



平成17年度テーマ展 「洪水の記憶」

開催期間 平成17年10月22日（土）～11月27日（日）

1995年1月の阪神淡路大震災、2000年6月に発生した三宅島の噴火、2004年10月の新潟県中越地震などの自然災害は、今も多くの人の記憶に刻まれています。最近では、九州で大きな被害を出した大型台風14号やアメリカのルイジアナ州などを襲ったハリケーンカトリーナが記憶に新しいところです。埼玉を流れる荒川も過去何度も洪水をおこし、大きな恵みとともに多くの被害をもたらしました。

今回の展示では、災害の歴史を振り返り、水とたたかった人々の記録と資料を紹介し、防災についてあらためて考える機会となれば幸いです。

【災害の歴史】

災害を大きく分類すると、自然災害（天災）と人為災害（人災）の2つに分けることができます。天災には風雨や雪などによる気象災害、地震や火山噴火などによる地変災害などがあります。人災には大気汚染や火災、交通災害そして戦争など多くの種類があります。災害の記録として最も古いものに『日本書紀』があります。『日本書紀』には、六世紀ころからの飢饉や洪水、旱魃などが記録されています。平安時代の『日本三代実録』や鎌倉時代の『吾妻鏡』にも日本各地の災害について、詳しく紹介されています。



火災で焼け落ちた将監塚・古井戸遺跡の竪穴住居跡
／奈良時代（埼玉県立埋蔵文化財センター提供）

文字による記録のほかに、発掘調査によって発見された遺跡や出土遺物からも、災害の痕跡を多く見ることができます。大風により木が倒れた跡、火山の噴火で降積もった火山灰、あるいは火災によって

崩落した竪穴住居、合戦によって焼け落ちた建物なども確認されています。

【洪水の記録】

洪水は、豪雨や融雪あるいはダムの決壊などによって、水が河川・湖沼から氾濫した結果発生する災害で、河川などの近くに住む人々にとっては最も恐ろしい災害の一つです。荒川もその名が示すとおり、過去何度も大きな氾濫を繰り返し、洪水に関する碑や多くの書物・絵画あるいは写真に記録されています。



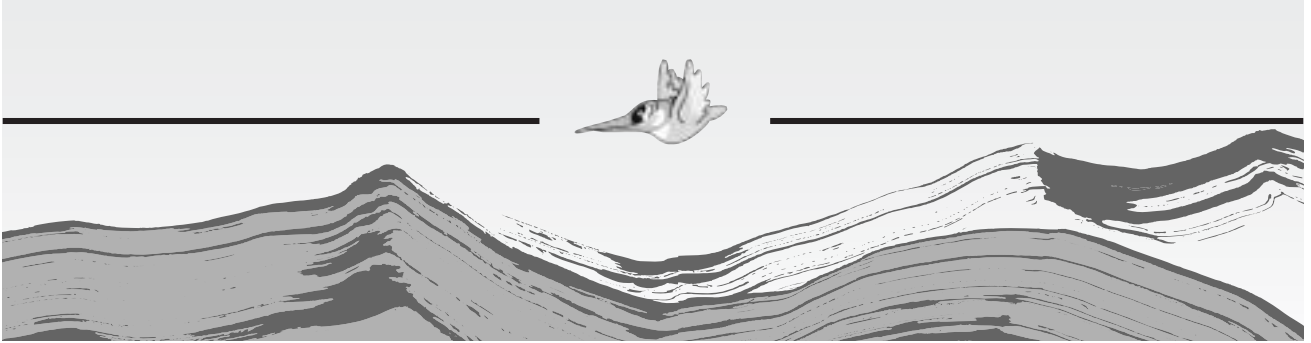
寛保治水碑／江戸時代（鷺宮神社の拝殿前）

江戸時代や明治時代には、洪水を題材とした絵画が多く描かれており、記録としての絵図ばかりではなく、浮世絵にも取り上げられるようになりました。洪水被害を克明に記録した絵図や、役人に提出した被害内容を記した手紙なども残っています。



浮世絵 千住大橋吾妻橋洪水落橋之図
／国明筆：明治時代（当館蔵）

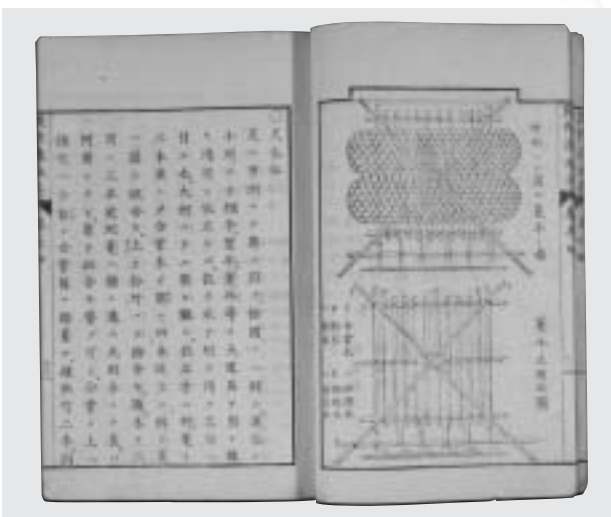
明治時代以降、絵葉書や写真帖などにも洪水は取り上げられています。特に、明治43年（1910）の大洪水は多くの写真が撮影されています。同年、フランスのパリでも洪水があり、同じように記録写真集として出版されています。



明治四十三年大洪水絵葉書（当館蔵）

【洪水に備える】

洪水被害を最小限にするため、人々はいろいろな備えをしてきました。村を囲む堤の絵図や堤修復の絵馬などは各地に残されており、堤防の築き方や護岸工事の方法については、多くの技術書や測量図が書かれています。また、大きな河川流域の低地に見られる水塚（みづか）や水難予備船は、洪水時に避難する建物や船として準備されていたものです。このように、洪水を防ぐ工事や洪水が起こった時の備えは、河川流域に住む人々にとって生命・財産に関わる重要なことでした。



堤防溝洫誌（ていぼうこうきょくし）／明治9年（当館蔵）

【現在の治水と防災】

洪水をはじめとした災害から身を守る方法は、現在においても我々の大きな課題の一つです。監視・

警戒体制の強化や施設の設置・強化など、技術的には進歩していますが、被害を完全におさえることは不可能な状況です。このため、国や自治体では防災



ヘリコプターを使った災害救助訓練／寄居地区消防本部提供

（企画展示担当 井上 尚明）

意識の普及や啓発のためのパンフレットなども作成しています。

また、消防署などでは日々防災訓練や災害出動を実施し、我々の生活を守る努力をしています。

コラム

台風の名称は、現在では台風14号のように、発生順に番号がふられています。キヤサリン（カスリーン）台風やジエン台風のような、カタカ丈の名称が付けられた台風を憶えていますか。終戦後、連合軍の占領下にあった一時期、台風は女性の名前が付けられました。その年に発生した台風をA・B・C…のアルファベット順に命名し、Kで始まるキヤサリン（Catherine）台風は昭和22年の台風11号に相当します。



～かわはくの展示から～

すごろくゲーム

この「きれいな川大好き すごろくゲーム」は、「水と暮らしのコーナー」にあるもので、スタートパネルから18枚のパネルを通過しながらゴールパネルまで行くというものです。きれいな水を大切に、美しい川を守っていくとともに、個人レベルでやって良いこととしてはいけないことを楽しく遊びながら学ぶという目的で作られています。

同時に3人まで遊ぶことができ、中央にあるボタンを押すとコンピューターが1から9までの数字を指示するので、その数だけ進んでいき、誰か一人がゴールに到着した時点で、そのゲームは終了ということになります。

18枚のパネルは、ゲームの進行順に①フライパンを川で洗いました②川の水は冷たくて気持ちいい③河原の砂利を取って庭に敷きました④米のとぎ汁を庭にまきました⑤近所に下水処理場ができました⑥カップラーメンの残りかすを流しに捨てたんだ⑦風呂の水で洗濯をしました⑧天気の良い日に河原で車を洗いました⑨子供会で河原の掃除をしました⑩歯磨きをするとき水を出しっぱなしにしました⑪ぼ

くの家に合併浄化槽が設置されました⑫工場で事故があり油が川に流れ込みました⑬工場見学に行ったら大きな浄化槽がたくさんありました⑭いらぬ乾電池を川に捨てました⑮河原にスケッチをしに行きました⑯お父さんが川にタバコを捨てている⑰家では雨水をためてトイレの水に利用しています⑱お父さんと二人でさいたま川の博物館に見学に行きました となっています。

やってはいけないことのパネルに停まると罰ゲームとして何コマか戻ることになり、逆にやって良いことのパネルに停まると褒美として数コマ先に進むことが出来ます。見ていると、意外に大人の方が熱中しているようです。（展示担当 針谷 浩一）



かわはくを支える人たち VI



今回は、「荒川大模型173」の展示解説や「野外教室」へのスタッフとしての参加など、様々な教育普及活動の場面で、活躍している「かわはくボランティア」のみなさんをご紹介します。川や水に興味のある方、環境や自然に関心のある方、子どもと一緒に活動してみたい方など、18名（10/1 現在）の方がボランティア登録され、川の博物館の強力なサポーターとして活躍しています。

日頃どんな時に、ボランティアとしての「喜び」や「やりがい」を感じているか話して頂きました。

Aさん：「荒川大模型173」などの解説をして、理解して頂いた時です。お礼を言われると本当にうれしくなります。

Bさん：こちらが一方的に説明するのではなく、来館者のみなさんと対話できた時ですね。説明に対して反応があるとやりがいを感じます。

Cさん：こちらの説明に対して興味や関心をもってくれた時です。もっと勉強しようとやる気になります。

Dさん：「荒川ゼミナール」などの研修会に参加して、自分の知的好奇心が満足した時です。

Eさん：子どもたちが一生懸命メモをとって聞いてくれた時ですね。子どもたちから「よくわかった」

と反応があった時は、特にうれしいですね。

Fさん：七夕づくりや的当てゲームなど、子どもたちのうれしそうな顔を見るのが一番の喜びです。

お話を聞く中で、当館の活動を支援して頂いているだけではなく、お客様と当館を結びつける重要な役割を果たして頂いていることがよくわかりました。（教育普及担当 寺尾 好夫）





● さいたま川の博物館での地域連携のとりくみ ●

当館では「荒川と人々の暮らしとの関わり」を常設展示のテーマとしており、これを深化し補完するために第2展示室で特別展などを開催しています。今年度、当館で企画した展覧会としては、特別展1本、テーマ展3本、さらに関連機関や団体との共同で、5本の連携展を計画しています。連携展とは、館の総合テーマである「荒川を中心とする埼玉の河川や水と人々の暮らしとのかかわり」の主旨を共有できる、荒川やこの地域と関わりのある機関や大学と協同で、各種の展示会を開催するものです。

これまでも年1～2本程度、第2展示室や2階ホールを利用した関係機関との共催展を開催してきましたが、連携展として本格的に館事業に位置付けられたのは今年度からです。今年度の連携展は、10月1日から16日には寄居町に事務局のある「荒川を撮る会」と『写真展』を、12月10日から25日には国土交通省荒川上流河川事務所と『荒川図画コンクール』を、平成18年1月8日から1月22日には長瀨町の「彩の川研究会」と『荒川百景』を、1月28日から2月19日まで「(財)河川環境管理財団」と『第25回川の写真コンクール』を、さらに2月25日から3月12日まで「立正大学」と『2005彩の国環境地図作品展』を開催します。『荒川百景』以外は巡回展で、秩父市歴史文化伝承館や立正大学など、県内を中心に各地を巡回しながら展示を行います。

これまで紹介した今年度の地域連携事業は、当館を会場とした展示会の開催ですが、地域との連携には他の手段も考えられます。すでに実施している分野では、周辺の博物館などとの相互広報や当館の機器の活用などがあります。展示に関わる分野では、たとえば周辺の博物館・資料館などと、巡回展や統一テーマによる企画展の同時開催なども考えられます。また、各分野の学芸員が配置されている当館からの専門分野での協力や展示用具の利用など、あるいは、展示のノウハウを生かした他館への技術的な支援も重要な地域連携の一つではないでしょうか。

具体的な地域連携事業は始まったばかりで、解決すべき課題も少なくありませんが、県立の博物館施設として相応しい連携事業を推進し、この地域の文化発信基地となるような事業を展開していきたいと考えています。

(企画展示担当 井上 尚明)



昨年度の第24回川の写真コンクール



今年度の「荒川を撮る会写真展」での展示風景
(当館学芸員と撮る会会員が協力して展示作業を行った)



岩淵水門と荒川放水路～かつて荒川は隅田川を流れていた？～



東京都北区志茂にある写真の旧岩淵水門（赤水門）は、都内の治水を考える上で、欠かすことのできない重要な施設です。ここには、国土交通省荒川下流河川事務所または荒川知水資料館を目標に、JR赤羽駅東口から歩くこと約20分（地下鉄南北線赤羽岩淵駅から約15分）で、訪れることができます。現在は、新岩淵水門（青水門）が昭和57年（1982年）完成し、その役割を終えています。荒川放水路開削事業の象徴的な建造物として保存されています。周辺の河川敷は、公園や遊歩道などとして整備され、近隣の住民の憩いと安らぎの場となっています。また、「3年B組・金八先生」のロケ地は、このすぐ下流です。

それでは、荒川放水路と岩淵水門ができるまでの話をさせていただきます。

明治時代、「荒川」の水は今の「隅田川」を流れていました。その「荒川」は、名前のお通り荒れる川そのものでした。大雨や台風のために川から水があふれ、家や畑が水浸しになっていました。とりわけ、明治43年（1910年）8月の大洪水は、東京下町一帯にたいへんな被害をもたらしました。水がすっかり引いたのは12月を迎える頃だったというのが、この洪水のすさまじさを物語っています。

この水害を契機に、東京下町を洪水から守るため、荒川に放水路をつくることになりました。荒川の水を隅田川から切り離し、下町を避けた新しい川を造り東京湾の東寄りに流そうと考えたのです。この時、青山 士（あきら）という人物が内務省の指示により荒川放水路の建設に着手しまし

た。青山は、パナマ運河の工事に唯一の日本人技師として参加した気鋭の技術者でした。青山は、来る日も来る日も工事現場に足を運び、作業員とともに汗を流したので、皆に親しみを持たれ尊敬されたそうです。

ところが、この工事には、大きな問題がありました。全長約22km、幅約500mもある放水路用地には、約1300戸2500人を超える人が住んでいました。人々は、やむなく家や土地を手放さなければならなかったのです。計画反対の陳情書や嘆願書が出されたという記録も残っています。

大正12年（1923年）、関東大震災が東京を襲い、難航する工事に追い打ちをかけました。あけて、大正13年（1924年）、ようやく岩淵水門が完成し、荒川の水は、隅田川と放水路に分かれました。その後も引き続き土手の補強工事などが行われ、22kmにも及ぶ放水路が完成したのは、なんと昭和5年（1930年）のことでした。19年という長い年月と、多くの人々の犠牲と努力のもとに完成した荒川放水路。おかげで東京下町は、大きな洪水から守られるようになりました。

昭和40年、新河川法により荒川放水路を荒川、岩淵水門より下流の荒川を隅田川と呼ぶことになりました。

なお、川の博物館では、本年度も、国土交通省荒川下流河川事務所にご協力をいただき、荒川と隅田川を巡視船で見学する野外教室を計画しています。

（教育普及担当 寺尾 好夫）



[荒川河口付近] 手前を流れているのは中川、間を走っているのは首都高速中央環状線



荒川の支流を訪ねる ー中津川ー

『河川大事典』によれば、中津川という名前の川は、全国に大小29河川もあると紹介されています。荒川の支流である本県の中津川は、首都圏にあっては紅葉の名所として知られている川です。また、現在滝沢ダムという大型ダムが建設中とあって、何かと話題になっている川でもあります。

全長28.5km。中津川の流路のすべては旧大滝村（現秩父市）に属し、その大半は奥秩父の峻険な谷を穿って流れています。以下、その水源から荒川と合流するまでを眺めてみることにします。

中津川の水源地は、埼玉・長野県境に位置する十文字峠の北東側斜面、標高1900m前後のところ。その小さな流れは北に向かって流れ、源流部は大ガマタ沢とも呼ばれています。そして標高を下げるに従い、幾本もの枝沢が中津川に流れ込んでいきます。沢筋に金山があったとされる金蔵沢、沢沿いに信州との交易路があったことから名付けられた信濃沢、カツラやシオジの原生林で知られる大山沢などで、いずれの谷にも豊かな自然がほとんど手つかずの状態に残されています。

中津川の上流部には、川沿いに中津川林道という名の細い車道がつけられています。この林道は、埼玉と長野とを結ぶ唯一の車道で（開通当時は有料でした）、今でもオフロードが県境の三国峠まで延々と続いています。

流れを東に変えた中津川は、やがて「彩の国ふれあいの森」の中を抜けていきます。中津川一帯の森林は、明治時代に林学博士本多静六氏らが所有していたものです。昭和になり、広大な森林が県に寄付されましたが、やがて林業が衰退するなかで、県は自然とふれあいながら森林や林業についての理解を

深めてもらう場として、「彩の国ふれあいの森」を整備しました。拠点施設である森林科学館のある平坦地は、かつて製材所や貯木場のあった場所で、その後日室鉦山に務める人たちの社宅が建てられたところです。

さらに少し下ると、中津川集落が左岸に見えてきます。江戸時代、平賀源内が奥秩父の谷に入って鉦山開発を試みたとき、本人が設計し滞在したという「源内居」が旧家幸島家の敷地内に保存されています（非公開）。

明治時代には林業も盛んに行われていました。そこで生み出されたのが、鉄砲堰という木材搬出の方法です。沢をせき止めて水をため、それを一気に放流して材木を押し流すというもので、堰を設けたとされる場所が大山沢や大若沢、中津川本流の各所に伝えられています。

中津川集落の下流で左岸側から合流しているのが神流川で、その上流では日室鉦山が現在も稼働しています。国内でも有数の金属鉦床を持っていたことから、ここで働くために県外各地から家族あるいは単身で住み込んだ人が大勢いました。最盛期の昭和35年ごろには3,000人に及ぶ鉦山町がこの奥深い山中にあったとは、今では想像もつかないことです。

中津川の紹介で、紅葉についてふれないわけにはいきません。中津川集落から塩沢集落に至る約8.5キロメートルの区間は、この谷筋でも特に溪谷美の優れた場所で、一般に「中津峡」と呼ばれています。1,400m前後の尾根を頂点とする切り立った断崖が続き、谷底を流れる清冽な水に紅葉が映えて、県内一の名勝地となっています。ただ、平成11年の台風による豪雨で、上流から流出した土砂が多く、淵を埋め、平凡な流れに変わってしまったところも少なくありません。

さらに下流では、滝沢ダムの工事が進められています。すでに堰堤本体は完成し、10月には試験湛水が始まりましたが、このダム建設によって4集落112戸が移転を余儀なくされたことを忘れることはできません。中津川は今後、大きく変わろうとしています。やがては、ダムから放水された水が、その下流で荒川に合流していくのです。

（教育普及担当 大久根 茂）



大山沢に復元された鉄砲堰

11月

10/22(土)~11/27(日)

テーマ展「洪水の記憶」

2/水

野外教室「荒川バスツアー」(自然史博物館連携事業)
内容:中津川の紅葉や日室釜山の見学 時間:8:30~16:30
集合:寄居駅北口 定員:25人(受付終了) 費用:1500円 ☎

5/土 サタデーミュージアム「不思議な船をつくろう」
時間:①10:30~12:00 ②14:00~15:30 定員:32人 費用:100円 ☎

14/月 県民の日イベント
時間:10:00~16:00
内容:各種子ども向けイベント

19/土 サタデーミュージアム「ボンボン蒸気船をつくろう」
時間:①10:30~12:00 ②14:00~15:30 定員:32人 費用:200円 ☎

20/日 荒川ゼミナール「荒川の河岸」
講師:黒須茂氏(元県立博物館長)
時間:13:30~ 定員:80人 費用:無料 ☎

27/日 映画会「源吉じいさんと子ぎつね」(18分)
時間:①13:30~ ②14:30~
定員:80人



12月

12/10(土)~12/25(日)

「荒川图画コンクール」(国土交通省連携展)

3/土 サタデーミュージアム「葉っぱでクリスマスカードをつくろう」
時間:14:00~15:30 定員:32人 費用:100円 ☎

11/日 映画会
「つるの恩がえし・竹の子童子・きつねとかわうそ」(30分)
時間:①13:30~ ②14:30~ 定員:80人

18/日 荒川ゼミナール「荒川・新河岸川の川船」
講師:高木文夫氏(ふじみ野市立歴史民俗資料館長)
時間:13:30~ 定員:80人(申込順) 費用:無料 ☎



かわはくで学ぼう!!

イベント情報コーナー

1月

1/8(日)~1/22(日)

絵画展「荒川百景」(地域連携展)

21/土 サタデーミュージアム
「色が変わる不思議な水」
時間:14:00~15:30
定員:32人 費用:無料 ☎

22/日 荒川ゼミナール「荒川の渡し」
講師:中山正則氏(越谷市立宮本小学校教諭)
時間:13:30~ 定員:80人(申込順) 費用:無料 ☎

28/土 出張博物館「水の不思議な性質を体感」
時間:①10:30~12:00 ②14:00~15:30 定員:30人
会場:川越南公民館(共催) 費用:無料 ☎049-243-0038

29/日 映画会「絵の中のぼくの村」(112分)
時間:13:30~ 定員:80人



2月

1/28(土)~2/19(日)

「第25回川の写真コンクール」
(財)河川環境管理財団連携展)

2/25(土)~3/12(日)
「2005 彩の国環境地図作品展」
(立正大学連携展)

4/土 サタデーミュージアム「手作り望遠鏡で野鳥観察」
時間:10:30~15:30(12:00~13:00 休憩・昼食)
定員:32人 費用:300円 ☎

18/土 サタデーミュージアム「静電気で遊ぼう」
時間:14:00~15:30 定員:32人 費用:無料 ☎

26/日 映画会「六羽の白鳥」(25分)
時間:①13:30~ ②14:30~ 定員:80人



毎月第2・4土曜日10:30~と14:30~は「わくわくサタデーミュージアム」・毎月1回(土曜日または日曜日)13:30~は「映画会」が開かれます。最新の情報はかわはく情報等で紹介されます。

ホームページでも紹介しています!

<http://www.river-museum.jp/index.htm>

【お願い】①行事は都合により変更になることもあります。ご了承下さい。②☎印のついた行事は事前申込みが必要です。電話またはFAXでお申し込みください。③定員になりしだい締め切ります。④川の情報もお寄せ下さい。

編集・発行

さいたま川の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39番地
TEL/048-581-8739(学芸) FAX/048-581-7332



彩の国さいたま

2005年10月21日発行



古紙配合率100%再生紙を使用しています